

移民文学：
ハニフ・クレイシの
『郊外のブッダ』を事例に

JA 日下



目次

1. はじめに
2. 移民文学にはどのような作品があるのか
3. なぜ移民文学が注目を集めているのか
4. 移民文学の特徴
5. 移民文学を実際に体験してみよう
6. おわりに

1. はじめに

文学には移民文学という、近年注目を集めているジャンルがある。名前からして「移民と関係のある文学の一種だろうか」といった推測はできるかもしれないが、それ以上のことは専門家でないとうわからないといった意見が聞こえてきそうである。しかし、じつのところ移民文学作品の多くに共通する主題を理解するのはけっして難しいことではない。移民文学を一言でいえば、「移民もしくはその子孫である作家が書いた文学」ということになる。また、移民が登場人物として出てくる作品も移民文学に含めることもある。

この章では移民文学、とくにイギリスにおける移民文学について話し、その例として最後に現代作家ハニフ・クレイシの小説『郊外のブッダ』を紹介したいと思う。

2. 移民文学にはどのような作品があるのか

移民文学といってもまだピンとこない方にとって朗報となるのが、じつはみなさんがおそらく一度は聞いたことがある作品名や作家で移民文学に含まれるもの、あるいは移民文学の作家として知られている人びとがいる。たとえばアメリカ文学になるが、「ロリコン(ロリータ・コンプレックスの略)」という言葉は『ロリータ』という小説が語源だが、この作品の著者ウラジミール・ナボコフ(Vladimir Nabokov)はロシアからフランスを経てアメリカへと渡った移民である。

ほかの例を挙げると、『くまのパディントン』シリーズも移民文学として数えることができる。みなさんの中にはパディントンのぬいぐるみを持っている方もいるかと思うが、パディントンは元々イギリスの児童文学シリーズの主人公である。作者マイケル・ボンド(Michael Bond)は生まれも育ちもイギリスであるが、じつはパディントンは南アメリカのペルーからイギリスにやってきた移民という設定になっている。パディントンがイギリス文化を知らないことが原因で引き起こされるドタバタ劇が作中で展開される。パディントンにはグルーバーさんという親友がおり、この人物もまた、東欧の国ハンガリー出身の移民である。二人(一人と一匹?)は移民という同じ境遇ゆえに心を通わせている。

そしてカズオ・イシグロ(Kazuo Ishiguro)もまた、忘れてはならない好例といえる。イシグロは近年ノーベル文学賞を受賞したことで、日本にもその名が広く知られるようになった。イシグロは5歳まで長崎で育ち、父親の仕事の関係でイギリスに移住してそのままイギリス国籍を取得した小説家である。彼の、特に初期の作品には移民に関する話が多い。

3. なぜ移民文学が注目を集めているのか

今なぜ移民文学が注目されているのか?その理由の一つは、現代がまさに「移民の時代」と呼べる時代であり、移民文学は移民の心理や境遇を理解する上で重要だからである。例えば、2015年にシリアなどの国々からヨーロッパへ大量の移民が押し寄せたのは記憶に新しい(この出来事は「2015年欧州難民危機」と呼ばれる)。例を挙げれば切がないが、た

たとえばアメリカ合衆国の現大統領(2020年時点)がメキシコや中央アメリカからの移民を食い止めようとメキシコとの国境に壁の建設を計画している話もそうであるし、みなさんにとってより身近なところでは、日本政府が人口減少による労働力不足を解消するために移民の受け入れ緩和を決定したというニュースが2019年に流れた(政府は表向きには移民政策ではないと述べていたが、実質移民問題と解釈できる)。

もちろん移民は現代に限った現象ではない。人類の歴史は移民の歴史であったときえいえる。しかし現代の移民がそれまでの時代と異なるのは、交通の発達によって、長距離かつ短期間で多数の移動が可能となった点にある。同時に、移民の増加とともに各国で移民排斥運動も高まっており、国境管理が強化される時代になっているということも見逃してはならない。現代はグローバル化が進んでいるという話をよく耳にするが、それと並行して反グローバル化とでも呼ぶべき現象も起こっていることになる。

イギリスの移民事情に目を向けてみよう。歴史上、ブリテン島には幾度も移民が入ってきた。「イングリッシュ」の語源は「アングル人の言葉」だが、このアングル人は5世紀にブリテン島に移住してきた集団の一つといわれている。そのほかにも、イギリスのお隣アイルランドからもたびたび移民がやってきた。19世紀のいわゆる「ジャガイモ飢饉」による食糧危機がイギリスへの移民を生み出した。さらには、20世紀中頃のアイルランドでの経済不況が再びイギリスへの移民増加の原因となった。こうした移民の多くはヨーロッパからの移民であった。

第二次世界大戦後の1948年を境に状況が大きく変わることになる。同年、イギリスで「英国国籍法(the British Nationality Act)」と呼ばれる法律が制定された。第二次世界大戦でイギリスは戦勝国になったが、それは多くの犠牲を払った勝利だった。町は空襲で破壊され、兵士・市民あわせて40万人近いイギリス人が亡くなったといわれる。戦後イギリスは復興を進めるが、若者の多くが戦場で命を落としたため、戦後イギリスは労働力不足に悩まされた。この問題を解消するために、海外から労働力となる人々を積極的に招き入れることになった。そのための法律が英国国籍法であった。

当時イギリスは世界中に植民地を持っていたが、英国国籍法は植民地に住む人びとにイギリス人と同等の権利(=イギリスでの居住権や自由に職を得る権利など)を与えるという法律であった。つまり、植民地からイギリスにやって来る働き手を増やそうとした。植民地で暮らす人びとの多くにとって、イギリス本国は文化的な憧れの場所であった。たとえるならば、ちょうど日本国内で就職や進学のために田舎から都会に出てくる人がいるように、イギ

リスに來れば仕事を得て今よりも良い暮らしができると信じた人達が海を渡ってイギリスにやってくるようになった。なかでもカリブ海地域からの移民が多かったが、それ以外にもアフリカや南アジア(後述のパキスタンからの移民の多くもこの時期にやってきた)の諸地域からもイギリスに渡った。

残念なことに、移民が増えて良いことばかりが起きたわけではなかった。豊かな生活に憧れてイギリスにやってきた移民を待っていたのは低賃金で重労働の仕事ばかりで、肉体的にも精神的にも辛い生活であった。さらには、移民が自分達の職を奪うという考えを抱いたイギリス人による移民排斥運動が起こり、1950年代に入ると人種間の衝突も発生した。こうした衝突で最も代表的な事件は、1958年にロンドンの地区ノッティング・ヒルでの暴動である。また、1960年代になるとイノック・パウエル(Enoch Powell)といった、移民排斥を煽るような政治家も現れるようになった。

1948年以降の移民は、それ以前の、ヨーロッパ各地からの移民と比べて(肌の色など)外見的にイギリス社会で目立ったため、差別の対象になりやすかった。先述のような人種間の衝突以外にも、移民に対する差別は日常的だった。なかでも有名なものは「犬と黒人とアイルランド人はお断り(No Irish, no blacks, no dogs)」などと書かれた看板や張り紙が家やオフィスの前に出され、求人や部屋の賃貸の対象として移民を排除する言葉が町中で見られたという¹。

こうした社会情勢を受けて、イギリス政府は植民地(すでにイギリスから独立していた場合は、旧植民地)からの移民制限へと方針転換する。一方で、しだいに移民の中から、移民としての自分の暮らしを描いた作品を発表する者が現れるようになった。彼女ら/彼らの作品群がイギリスにおける現代移民文学を形成していった。移民文学を読むことで、私達読者は移民の目から見たイギリス社会の歴史を追体験できる。

イギリスにおいて移民文学が今「ホット」であるのに、もう一つ忘れてはならない理由がある。ポーランドやバルト三国などの東欧からの移民の増加、そしてイギリスのEU離脱問題である。近年イギリスでは移民問題への関心が高まっており、その意味でも移民文学はかつてないほどに注目されている。事実、東欧諸国からイギリスへの移民の暮らしを描いた小説や映画、テレビドラマなどが数多く製作されている。

¹ もっとも、差別や偏見は実在した一方で、こうした看板自体の存在については諸説ある。例えば、イギリスのガーディアン紙への読者投稿によると、“no coloureds”や“no West Indians”といった看板は実在したが、“No Irish, no blacks, no dogs”と書かれた看板は「神話」でしかないという(Draper)。

イギリスは1973年に欧州諸共同体に加盟した。この諸共同体は1993年に欧州連合(EU)となり、人や物資の自由な移動が可能な単一市場がヨーロッパに誕生した。一方、1989年に共産圏が崩壊してから、東欧諸国がEUへの加盟を求めようになり、2004年以降東欧諸国(たとえば2004年にポーランド、ハンガリー、バルト三国など、2007年にルーマニアやブルガリア)の加盟が実現した。その結果、より良い生活を求めてイギリスやドイツなどの比較的豊かで社会福祉が充実した国への、東欧からの移民が増加した。歴史は繰り返すとはよく言ったもので、移民増加とともに移民排斥感情も高まることとなった。しかし、EU内で人や物資が自由に移動することは条約で定められているため、イギリスがEUの一員であるかぎりには他のEU加盟国から移民がやってくるのを拒むことはできない。2016年、移民排斥感情の高まりなどを受けて、イギリスはEU離脱を国民投票で決定した(離脱の是非は僅差だったが)。その後、幾度のEUとの交渉やイギリス議会での承認を経て、2020年1月末に離脱が実現した。

4. 移民文学の特徴

移民文学には、移民ならではの体験や考えが書かれていることが多い。とはいえ、移民経験のない読者にとってはそれがどういったものなのか想像しづらいかもしれない。そこで、多少話が乱暴になることを覚悟の上で、イメージしやすくするために「転校」のたとえを用いて移民について考えてみよう。移民とはある地域から別の地域へと移動する、いわば地球規模の転校生のようなものといえる。自分が転校生になった、あるいは自分のクラスに転校生がやってきたと想像してほしい。そこには三つの特徴が挙げられる。第一に、新しい環境に馴染むには時間がかかる。社会のルール(ここでは校則やその地域の慣習などがそれに相当する)の違いに戸惑ったり、新しい友達ができるまで寂しい思いをしたりすることもあるだろう。以前いた学校での生活や友達のことが忘れられないこともある。概して、昔の自分と今の自分との間で気持ちが揺れ、居場所を見つけられない感覚をおぼえるものである。

第二に、転校生がいきなり学級委員長や生徒会長になるのは稀である。そういった役職には、以前からその学校にいた生徒が就くのが一般的である。転校生の中には最終的には中心的役割を担う者、早い段階で頭角を現す者もいるだろうが、たいていは時間がかかる。

第三に、転校生によっては、親の都合で転校させられて新しい環境に馴染めずにつらい思いをする人もいる。あるいは、方言を話す生徒がいじめにあうことさえある(逆に、標準

語を話す人が地方に転校していじめの対象となることもありうる)。そうすると、子は親を責め、親子喧嘩になるといった事態さえ生じる。

移民文学にもしばしばこうした特徴と似た傾向がみられる。第一に、登場人物が自分のアイデンティティについて悩む様子が描かれる。イギリス移民文学では、登場人物(ときとして作家自身の分身と解釈できる)は国籍上ではイギリス人だが、社会的には周囲の人びとによそ者と認識されているという感覚を抱くことがある。こうした作品では登場人物のルーツ探しがしばしば描かれる。それは移民の子孫に関しても当てはまる。たしかに移民の子孫にとっては「生まれ育った場所＝母国」となるが、それでも肌の色の違いや親から受け継いだアクセントなどが原因で、ときに社会の主流から疎外されたり、差別を受けたりすることがある。彼女/彼らが自分の親や祖父母が語って聞かせる遠くの文化に憧れを抱く様が描かれる一方で、実際その地を訪れてみると自分が現地の文化の一員ではなかったことを思い知らされるといった内容の作品もある。

第二に、貧困や社会底辺の生活を描いた移民文学もある。転校生がいきなり学級委員長や生徒会長になるのが稀であるように、移民の多くは新しい環境では社会の最下層からスタートする。貧しい暮らしや職が得られないために抱えるフラストレーションが描かれ、なかには薬物に手を出したり、泥棒や詐欺に手を染めたりする様子が描かれることもある。

第三に、親世代が移民である二世作家の場合、親世代との関係を描く傾向がある。移民にとって親子関係は複雑で、子は親との間に文化的ギャップを感じ、それがときに世代間の対立を生む。さらには、往々にして子孫は移住先の国の言葉を母語とするが、日本からイギリスへの移住の場合のように親にとってその言葉は外国語である可能性もある。そうした場合は、言語的な違いが世代間の対立に発展することさえある。その反面、子は食事や慣習などの文化や、身体的特徴などを親から受け継いでいる面もある。以上のように、移民の子孫は親の世代に対してときに反発しつつも、同時に切り離せない何かを感じる。優れた移民文学の作品にはそうした複雑な心理が見事に描き出されている。

移民文学にこうした特徴がみられるのは、作家にとって「自分は何者か」という問いが執筆活動の原動力になっているからだと考えられる。換言すれば、移民文学とは作家にとっての自分探しの旅、あるいは自分の体験を作品として残そうという試みと表現できる。

5. 移民文学を実際に体験してみよう

移民文学作品の冒頭部分を一緒に読みながら、この章で学んだ移民文学の特徴を実感してみよう。取り上げる作品は『郊外のブッダ (*The Buddha of Suburbia*)』で、ハニフ・クレイシ (Hanif Kureishi) という作家が1990年に発表した作品である。「クレイシ」という名前をみて、もしかしたら「暮石」とか「呉石」のような日本からの移民なのかと思った方もいるかもしれない。Nice try! しかし残念ながら、この作家はパキスタン人の父親とイギリス人の母親を持ち、1954年にイギリスで生まれた人物で、日本とは無縁である。日本と縁があるイギリス人作家は前述のカズオ・イングロがいる。偶然にもイングロも1954年生まれだ。イングロの作品、とくに日本を舞台にした初期の作品には移民文学の特徴を読み取ることができ、そちらの話も大変興味深い。それはまたの機会にさせていただくことにする。

クレイシはイギリスへの移民の子孫で、彼が書いた『郊外のブッダ』は移民文学の作品として理解することができる。この作品はクレイシ自身の人生をモデルにした小説で、このような小説は「自伝小説」と呼ばれる。自伝のような話だが、同時に小説なので色々な点がフィクション、つまり作り話になっている。『郊外のブッダ』は次のような書き出しではじまる。

俺の名前はカリム・アミール。生まれも育ちもほとんどイギリス人。おかしい類のイギリス人だって言われることがある。歴史ある二つの国が出会って生まれた、いわゆる新種って奴。でもそんなことは気にしない。(p.3: 以下も同様に著者による訳)

My name is Karim Amir, and I am an Englishman born and bred, almost. I am often considered to be a funny kind of Englishman, a new breed as it were, having emerged from two old histories. But I don't care.

この文章を詳しくみていこう。主人公兼語り手はカリム・アミールという名前であることがわかる。「カリム」も「アミール」も、みなさんにとって馴染みのあるイギリス人の名前っぽくないなど思われるかもしれない。ジョージとかマイケルとか、ケイトとかメアリーとか、そんな名前とは違った、イギリス人にとってどこことなく「異国情緒」を感じさせる名前である。移民文学の特徴を理解するためには、じつはこれがとても大切になってくる。移民文学は移民もしくはその子孫によって書かれた作品であるから、この作品のようにその多くは移民の視点から書かれている。『郊外のブッダ』は最初にかリム・アミールという名前を持ち出すことで、「これは読者のみなさんがご存知の従来のイギリス文学とは一味違います。イギリス社会にもたらされた新しい人びとの文化・生活を描いたお話になります」と宣言していることになる。

事実、移民文学を読んでいると、イギリス小説を読んでいるのだが、どこことなくイギリスっぽくない話という印象をしばしば受けることがある(ところで、「イギリスらしさ」とはいったい何なのだろうか)。『郊外のブッダ』では冒頭第一文からそれが見事に演出されていることになる。

「イギリスっぽくないイギリスの作品」という特徴に加えて、『郊外のブッダ』でもアイデンティティをめぐる心の葛藤が主題になっていることも忘れてはならない。語り手は第一文でまず「俺の名前はカリム・アミール」と自己紹介しているが、それはこの物語が自分語りの話であることを示唆している。事実、第二文で彼は「生まれも育ちもほとんどイギリス人」であり、自分をイギリス人の主流とは呼べない、どこことなく劣等感を抱いている存在であることがうかがえる。その理由は、自分が「歴史ある二つの国が会って生まれた、いわゆる新種」だからである。父親の故郷インドと母親の故郷イギリスという二つの地域の歴史を自分の文化的背景に持つ存在であり、それゆえどちらでもない中途半端さを感じている。語り手は「そんなことは気にしない」と強がっているが、もちろんこれは文字通りに受け取るべきではなく、じつはとても気にしているからこそ、冒頭からずっと自分の出自やアイデンティティに関わる話をしているのである。

前述の冒頭部分に続いて、カリムは以下のように語る。

二つの大陸と血縁の奇妙な組み合わせ、この場所とここではない場所の組み合わせ、属しているけれども同時に属していないという感覚。たぶんそのせいで俺は落ち着きがなく、飽きっぽい性格になったのだろう。(p.3)

Perhaps it is the odd mixture of continents and blood, of here and there, of belonging and not, that makes me restless and easily bored.

「二つの大陸と血縁」は、インドを含むアジア亜大陸とイギリスを含むヨーロッパ大陸、そしてインド人の血とイギリス人の血を指す。この文章から、カリムが二つのアイデンティティに引き裂かれて、自分の居場所がよく分からない感覚を抱きながら生きていることが伝わってくる。落ち着きがない性格は、移民の子孫であるゆえに社会の下層で暮らすことを余儀なくされており、日頃からフラストレーションが溜まっていることを示唆していると解釈することができるだろう。

そんなカリムがインド人の父親をどのように見ているかがうかがえる場面がある。

おやじは1950年からイギリスで暮らしてきた。20年以上もだ。そのうち15年は南ロンドンの郊外に住んでいた。でもイギリスにやってきたばかりのインド人みたいに、いまだに頼りない足どりで近所を歩いてはこんな質問をしていた。「ドーバーはケント州の町だったかな？」俺思ったんだけど、イギリス政府雇われの身なんだから、いくら薄給でしかない公務員だったとしても、そのくらいは知ってないとまずかったんじゃないかな。(p.7)

Dad had been in Britain since 1950 – over twenty years – and for fifteen of those years he'd lived in the South London suburbs. Yet still he stumbled around the place like an Indian just off the boat, and asked questions like, “Is Dover in Kent?” I'd have thought, as an employee of the British Government, as a Civil Service clerk, even as a badly paid and insignificant a one as him, he'd just have to know these things.

カリムはイギリス育ちで、それなりの教育を受けており、ドーバー(フランスからやってくる人にとっての玄関口として有名な、白亜の岸壁が美しい港町)がどの州にあるのかくらいは常識だと考えている。日本人ならば「横浜は神奈川県にある」や「神戸は兵庫県にある」ことを知っていて当然とみなすのと同じ発想といえ、みなさんにも理解していただけるだろう。移民である父親はイギリスで生まれ育っていないため、こうした知識が欠落しており、それゆえカリムは父親を軽蔑しているふしがある。さらに言えば、同小説のタイトルにもなっている「郊外のブッダ」とは父親を指している。カリムの一家はロンドン郊外に住んでいるが、父親がある日同僚にそそのかされてヨガを始め、やがて地元の人達向けのヨガ教室を開く。ヨガを教える父親の様子を「ブッダ」と形容しているのだが、そこにはカリムの目から見た皮肉がこめられている。

親子間のジェネレーション・ギャップがこうして描かれているわけだが、だからといってカリムは父親を軽蔑の対象としかみなしていないわけではない。上記の文章に続いてカリムは語る。

おやじは、出会ったやつとは誰とでもよろしくやる方法を教えてくれた。女の子だろうと男の子だろうと。おかげで、礼儀正しさとか素直さとか、もっといえば上品さなんかよりも、魅力が一番の宝物と思うようになった。(p.7)

Dad taught me to flirt with everyone I met, girls and boys alike, and I came to see charm, rather than courtesy or honesty, or even decency, as the primary social grace.

「女の子だろうと男の子だろうと」という言葉は、カリムがバイセクシュアルであることを含意している。その点はここでは置いておくとしても、カリムにとって父親から受け継いだものが確かにあることが語られている点は見逃すべきではない。親子はときに対立し、ときに絆を感じる関係にあることが移民文学の特徴の一つであることがよくわかる一例になっている。

6. おわりに

本章ではイギリスにおける移民文学について、実例を用いながら学んだ。近年日本でも海外出身の方が多く暮らすようになってきている。日本でも移民文学というジャンルが文壇で大きな位置を占める時代がいずれやって来るのではなかろうか。いや、じつは明治時代、日本の怪談話をまとめたラフカディオ・ハーンという作家がおり、彼はギリシア生まれのアイランド人だが、日本人女性と結婚し「小泉八雲」という名で日本で暮らした。また、近年では2017年に芥川賞にノミネートされた温又柔(おん ゆうじゅう)や2019年にやはり同賞にノミネートされた李琴峰(り ことみ)らの台湾出身作家に代表されるように、日本と移民文学はすでに深い関係にあるのだ。

移民文学は小説だけでなく、映画などの映像作品もあるので、たとえ小説を読むことが苦手な方でも、移民を描いた映画やテレビドラマを観てはどうだろうか。この機会に移民文学の作品を実際に手にとり(あるいは映画やドラマを観て)、移民の考え、移民が抱える諸問題を理解することは、移民がもたらす社会の多様性と向きあうための重要な手助けになるにちがいない。

参考文献

Draper, John (2015). “No Irish, No Blacks, No Dogs, No Proof.” Letters. *Guardian*.
<https://www.theguardian.com/money/2015/oct/21/no-irish-no-blacks-no-dogs-no-proof>

Kureishi, Hanif (1990). *The Buddha of Suburbia*. Faber and Faber.

もっと知りたい人のためのブックリスト

イギリス歴史について

- ・川北稔 (2020).『イギリス史 上・下』山川出版社.
- ・パニコス・パナイー (2016).『近現代イギリス移民の歴史: 寛容と排除に揺れた200年の歩み』浜井祐三子, 溝上宏美訳、人文書院.

移民文学の作品、および作品研究

- ・北島義信.「世界文学シリーズ イギリスにおけるインド・パキスタン英語文学—ハニフ・クレインの描く南アジア移民第二世代の現実」『民主文学』549号(2011年7月)、130-39頁.
- ・ケン・リュウ (2017).『紙の動物園 (ケン・リュウ短篇傑作集1)』古沢嘉通訳、早川書房.